

## 戦前期における日中民俗学の関わり

Relationship on Folklore Study between China and Japan before 1937

王 京  
WANG JING

**要旨：**本論は、日中両国民俗学発展史についての比較研究を視野に据え、従来日中両国の民俗学史研究ではあまり触れられてこなかった日中戦争までの両国民俗学の関わりの様相を究明し、その特徴、影響、限界などについて考察することを目的とする。

明治末に日本留学した周作人は欧米の理論を吸収しながら模索期の日本民俗学を見つめ、独自の学問観を形成していた。後に「民俗学」という用語を中国に導入し、北京大学を中心に歌謡収集や民俗学の提唱において指導的な立場を発揮しただけではなく、柳田国男を中心とした日本民俗学の良き理解者と紹介者でもあった。

何思敬は友人の関係で『民族』時代の日本民俗学に近い距離で接し、学問の社会使命感、欧米学問を吸収する重要性などを身をもって感じていた。留学中、中国の民俗学運動を紹介し、帰国後中山大学民俗学会の初期の活動に積極的に関わり、とくに欧米理論の導入に重要な役割を果たした。

1932-33年、鍾敬文、婁子匡を中心とした中国民俗学会は、日本の民俗学会との間に組織的な交流とも言うべき活動を展開したが、種々の理由で長続きしなかった。鍾は日本の学者との交流によって学問研究の向上に努め、30年代半ば日本留学も果たした。二人は民俗雑誌を根拠地に日本との関わりを保っていたが、日中戦争の勃発によって両国民俗学の関わりは途絶え、1980年代まではほぼ空白を呈した。

留学を主とした契機にして、戦前中国民俗学の重要人物が日本民俗学と直接的な関わりを持っていたが、両国の関わりは中国側が日本を経由して欧米理論を吸収するのが主要な形であり、しかも個人への依存度が大きく、継承関係もあまり見られなかったため、両国民俗学への影響が限定的であり、しかも両国の間にその濃淡の差が大きかった。

▶キーワード 周作人 何思敬 鍾敬文 中国民俗学会 日本民俗学会

今日民俗学という名の下で議論される個々の領域への関心は、かなり古い時代まで遡ることができるが、学問としての民俗学は、世界的に見れば、ナショナリズムの興り、国民国家の形成を背景としている。その特徴の一つとして、とくに初期の形成期において、他者との出会いによって生じた、自らの文化的アイデンティティを確認し再認識する気分の強かったことが挙げられる。中国と日本において民俗学は共に「西洋の衝撃」に直面して社会が急速に変わりつつあった時代に胚胎しており、さらにほぼ同時代的に進行しているという意味で、互いに通じ合うところが多い。日中両国民俗学の成立・発展の歴史を考察することは、両国の社会発展、学術伝統や価値観などにおける相違や、近代化過程での共

通性に対する理解につながる。しかし、とくに共通性の場合、何が構造的な相似で、何が接触や交流によるものかを見極めるには、まず両国民俗学の関係がどれほど近いか或いは遠いかを正確に定める作業が求められている。

今日まで中国民俗学あるいは日本民俗学の歴史に関する研究は多いが、両者の関わりについて系統的に整理する研究はまだ見当たらない。そこで将来日中両国民俗学発展史の比較研究のための予備考察として、本論では、従来不明だった戦前期の両国民俗学の関わりの様相を、中国民俗学運動において重要な役割を果たした人物の活動を手掛かりに明らかにし、さらにその関わりの特徴や影響、限界とその理由について論じて行くことにする。

## 一、北京大学時代—周作人

中国において、現代民俗学と直接つながる学問の発端を新文化運動の一環として1918年北京大學における歌謡収集におくのがほぼ定説となっている。中日民俗学の関わりは、これよりさらに遡ることとなる。まず中国民俗学草創期の指導者の一人でもある周作人(1885-1967)を挙げなければならない。(写真1)

彼は1914年1月に『紹興県教育会月刊』第4号に「童謡之研究」(1913年12月付)を寄稿し、中国で初めて「民俗学」という言葉を使った。さらに「徵求紹興児歌童話啓」で「童謡、童話を採集し一篇となし、以て越国の土風の特徴を保存し、民俗研究、童謡教育の素材とする」ための協力を呼び掛けている。これは兄の魯迅が1913年2月に教育部の『編纂処月刊』第1巻第1号の「擬播布美術意見書」で唱えた「国民文術研究会を組織し、各地の歌謡、俚諺、伝説、童話等を研究し、その意義や特徴を明らかにし、その長所を生かし、さらに教育を助けるべきだ」という提言と呼応するものでもあった。しかし当時、社会の反応はあまり無かったようだ。歌謡収集で始まる中国の民俗学運動は、4年後の1918年まで待たなければならなかった。

1918年2月1日に『北京大學日刊』で「北京大學徵集全國近世歌謡簡章」を載せ、全国範囲で宋朝から当代までの歌謡を集めることを宣言した。その初期の責任者は劉復、沈尹默、錢玄同、沈兼士と並んで、1917年から北京大學の教授として赴任した周作人もいた。1920年「歌謡研究会」が組織され、沈兼士と周作人はその責任者であった。1922年「北京大學研究所國學門」が創立されると、学長の蔡元培が研究所所長を兼任し、沈兼士が主任となり、その下の「歌謡研究会」は周だけが主宰することとなった。<sup>(1)</sup>

文化史的立場で童謡歌謡の価値を高く評価し、特に民俗学の研究を唱えるのが他と異なる特徴と言える。例えば、1922年12月6日の『北京大學日刊』に歌謡研究会の規則を掲載しているが、周の意見を取り入れて歌謡収集の初期と比べて二つ大きな変更があった。一つは、収集の時代範囲を「宋朝から当代まで」から「当代に通用しているものに限る」と改



写真1 1932年秋の周作人  
周作人が妻子匡に贈った写真、自筆の題字がある。  
『民間月刊』2-7口絵(1933年7月)

めている点であり、もう一つは「猥褻に関わらないもの」というかつての制限を外し、「迷信や猥褻に関わるものであっても研究する価値があるので、…寄稿者が前もって選別する必要はない」としたところである。1922年に発刊された『歌謡週刊』の「発刊詞」の冒頭では「本会が歌謡を収集する目的は二つあり、一つは學術のためであり、今一つは文芸のためである。我々は民俗学の研究が今の中国において間違いなく重要な事業であると信じる」と述べ、「歌謡は民俗学の重要な資料である。我々はこれを集めて専門的な研究に備えようとしている。これが第一の目的である。従って投稿者は前もって選別をせず、記録し送付するのを希望する。學術的には猥褻や粗末というものはないのである」と民俗学のための歌謡収集という立場を全面的に打ち出している。

周の民俗学との接触は日本留学時代に遡ることができる。彼は1906-1911年日本に留学していたが、この間のことについて日記は残っておらず、後年の文章から断片的に窺うしかない。それによると、日本に渡った周は言語の基礎は全くなく、日本語について最初は留学生会館の補習班で菊池勉に、後に法政大学の予科に入り、保科孝一、大島莊之助、市河三陽などについて勉強していた。<sup>(2)</sup>最初の2年間は対外的に専ら兄の魯迅に頼りながら、殆ど外出もせず、時には丸善などに通い、英語の本ばかり読んでいたという。<sup>(3)</sup>この時に、イギリス民俗学会の主要メンバーでもあったラングの神話研究に接し、さらに欧米の人類学へと開眼し、ハートランド、マカロック、フレーザーなどの影響を受けていた。<sup>(4)</sup>1909年魯迅が帰国してからは、より主体的に日本社会への理解や適応が求められたこともあり、落語、狂言、俳句、漱石など日本の庶民文芸や近代文学との接触を多くした。

時は恰も農政官僚であった柳田国男が1908年に九州の椎葉村に視察旅行し、そして水野葉舟の紹介で遠野出身の佐々木喜善と出会い、民俗的世界に目覚めはじめた時期でもあった。1909年と1910年に柳田は記念すべき三部作『後狩詞記』、『石神問答』と『遠野物語』を次々と世に出していったが、この中で周は『石神問答』と『遠野物語』の1910年の初版本を購入している。

特に後者について30数年が経った1944年にも「『遠野物語』が出版された頃、私は本郷辺りで下宿していた。すぐ発行所に駆け付けて一冊を入手した。合計350部が刊行された中、私が持っているのは291番であった。表紙には少々墨痕があったので取り替えてほしかったが、番号付きなので順番で売るしかないと言われた」という些細なことまで「なお覚えていゝ<sup>(5)</sup>」ほど、印象が深かった。

『遠野物語』は私家版なので、発行所はないはずである。それより一ヶ月前に刊行された『石神問答』の発行所である聚精堂が『遠野物語』の売捌所ともなっており、『石神問答』には『遠野物語』の近刊予告も載せていることなどを考え合わせれば、周は先に『石神問答』を手に入れ、そこの広告を手掛かりに発売早々聚精堂に駆け付けて『遠野物語』を購入した経緯が想像される。『石神問答』は刊行に先立って『読売新聞』に広告が載せられており、<sup>(6)</sup>周も当時の留学生と同じように毎日『朝日新聞』と『読売新聞』を読んでいたので、<sup>(7)</sup>そこで情報を得て購入したのであろう。その後、周はさらに『後狩詞記』も探し求めていたが、初版50部しかないこの本をついに入手することはできなかった。

1931年に周は「遠野物語」という一文を著し、同書を紹介した上、その序文と49-52番及び109番の5話を中国語に翻訳し、合せて当時周が所有している『石神問答』、『遠野物語』

から1929年の『民謡の今昔』までの柳田著書10冊を挙げるなど、日本民俗学における「柳田氏の開拓の功」を紹介している。<sup>(8)</sup> 管見の限り、これは中国へ柳田及びその業績を体系的に紹介した最初のものであった。

このように周作人が早い段階で柳田国男への関心を示し、とくに『遠野物語』を紹介したことは、よく知られている事実でもある。<sup>(9)</sup> しかし彼の日本民俗学への関心は、最初から柳田一人、或いは柳田民俗学だけに向けられていたわけではない。周作人は「遠野物語」の中で、柳田の著作を紹介した後、以下のように、日本民俗学小史とも言うべき記述を行っている。

「遠野物語は深い印象を与えてくれた。文章は勿論、民俗学の豊かな趣味も示してくれた。当時の日本において、大学の中では坪井正五郎の人類学講座があり、民間では高木敏雄の神話研究があるが、民俗学の方は甚だ低回しており、柳田氏こそこの種の学問を発達させた者である。しかし、なぜか彼は民俗学ではなく、始終「郷土研究」と称している。1910年5月に柳田氏が刊行した『石神問答』は34通の往復書簡からなり、村々で信仰される神道を議論するものであった。6月に『遠野物語』を刊行した。この二書は、民俗学界の陳勝呉広であるに過ぎないが、実はこの種の学問の基礎を作ったのである。文献上の列挙推測だけではなく、実際の民間生活から着手しているので、すがすがしい活力があり、自然に人の興味を惹きたてることができる。1913年3月、柳田氏と高木敏雄が共同で月刊『郷土研究』を編集し、この（民俗学の）運動は正式に始動した。その時、石橋臥波が多くの名流や学者と連絡を取り、民俗学会を組織して季刊を発行していたが、内容的にあまり充実ではなかったようだ。石橋の著した暦、鏡、厄年、夢、鬼などに関する著書は、私はみな購入しているが、しかしなんとなく要領を得にくい感がある。或は文献に偏っているせいかもしれない。高木はかたわらこの民俗学会にも参加している。後に、彼は何かの不満があり、あまり関わらなくなってから、『郷土研究』は柳田一人の仕事になったと言える。この種の事業はだいたい持久しにくい。読者は始終600余名に留まっていたそうだ。第4巻が出た後、ついに1917年の春に停刊が宣言された。しかし月刊は停刊したが、郷土研究社はまだ存しており、この方面の著書を刊行している。今日に至って、私の知っている限り、郷土研究社叢書5冊、炉辺叢書約40冊を出している。（中略）柳田氏の学問の治めかたは素朴で飾り気がなく、文筆も精美で、読む気がそそられる。同輩の中で唯一早川孝太郎だけが比することができよう。早川氏は『三州横山話』（炉辺叢書）、『猪・鹿・狸』（郷土研究社叢書）などを著しており、何れもよく書けている。それは著者が画家でもある故、観察と描写は甚だ細密だからである。」

この文章が執筆された1931年には、まだ日本民俗学の輪郭が鮮明ではなかった。ここで周は、坪井正五郎の人類学講座、高木敏雄の神話研究、石橋臥波の研究や民俗学会の動向、早川孝太郎の著作などについてしっかり目を配っている。また後年の回想によれば、彼は柳宗悦の民芸研究、有坂与太郎の玩具研究、高野辰之の歌謡研究などにも多大な関心を寄せていたことが分かる。<sup>(10)</sup>

ここに触れられた石橋の著作は恐らく『夢』（宝文館1907年）、『鬼』（裳華房 1909年）、『個人社会 厄年の話』（人文社1913年）、『国民性の上より観たる鏡の話』（人文社1914年）、『二十世紀大雑書第1巻』（人文社1914年）などであろう。周はそれらの研究がじっくりこな

かった理由として「文献に偏っているせいかもしれない」と述べている。そして対照的に柳田国男の『遠野物語』などを高く評価する理由として、「文献上の列挙推測だけではなく、実際の民間生活から着手しているの、すがすがしい活力があり、自然に人の興味を惹き立てることができる」からとしている。

早川の業績について「観察と描写は甚だ細密だから」、「よく書けており」、乃至柳田に比肩することさえあり得ると評価していることや、柳田国男のものであってもやや文献に偏った『石神問答』や『郷土研究』の諸文章などについてはあまり立ち入った紹介、評価をしなかったこと、或いは柳田が忌避した性の問題に積極的に取り組み、「猥褻なもの」に対する収集と研究を声高らかに主張したことなどを考えれば、周は同時代の日本における民俗学の状況を広く把握した上で独自の理解と判断で取捨選択していることが分かる。柳田が当時避けていた「民俗学」という言葉で彼の学問を括っているところにも同じことが言える。

帰国後自ら「歌謡研究会」を主宰するようになると、歌謡収集の範囲を宋朝以降から当代に限定したことも、自らの確固たる民俗学理解に基づいた行動であったが、民俗学の現実的な意味を強調したことと合せて、日本で先駆的な業績を作っていた柳田国男への理解や憧れがあったと考えられる。

その後も周は柳田国男の研究を高く評価し、その著書を数多く買い求め、また時折紹介をしている。例えば、「小さき者の声」（1935年10月27日付）の冒頭で、「柳田国男の著作は平素より留意して捜し求め、ほとんど手に入れることができた。既に絶版した初期の『後狩詞記』がついに入手出来なかったのを除くと、1909年の数限定の初版本『遠野物語』から今年新たに刊行された増補版の『遠野物語』まで、民俗学に関するものは大体揃っている。…新旧大小合わせて25種類を集めることができ、成績はまあまあ悪くないと言えよう」と満足げに述べている。<sup>(11)</sup> 再版覚え書きを載せた『遠野物語』増補版が郷土研究社より刊行されたのは1935年7月のことであったが、周はそれをすぐに入手したことが分かる。戦時中の1943年7月30日付「祭神迎会について<sup>(12)</sup>」でも1942年出版された『日本の祭』を枕に中国の祭の様相を描き日本のそれと対比している。

しかし同時に、中国では日本と同じような学問の領域が確立されうるかという問題に対して次第に疑問を持つようになった。例えば、「聴耳草紙」（1933年12月）では彼は「民俗学はもとより野の学問であり、官学によって支えられることはあり得ない。今までの歴史はその証拠である。それが中国において発展することを願うなら、最初からやり直し、在野の学者を主幹にしなければならない。佐々木氏のような人物はまさに我々が尊敬すべき手本であろう<sup>(13)</sup>」と述べ、従来大学の研究者を中心とした中国の民俗研究の状況に異議を申し立てている。

後に、弟子で当時教育総署駐日本留学生監督として在任中の方紀生（1908-1983）宛の書簡（1942年1月28日付）では、「(傳) 芸子からの手紙では、貴兄は謡曲を研究なさるさうだが、能楽をききに行かれたかどうか。それも甚だよいが、若し勉強なさるならば、私の考へではやはり民俗学の方面に重きを置かれるのがよいと思ひます。蓋しこの学問は中国には甚だ缺乏してゐるし、また今ちようど要求されてもゐるのだから。柳田一派の学問は甚だ著実です。但し郷土研究は中国では恐らく当分發達を期し難いやうです、窃かに思

ふに目下最も必要なことは外国の所謂文化人類学（FrazerがSocial Anthropologyと称するもの）であります。兄がもし公余にこれに従事されるならば、中国の学界に裨益するところ少なくないと思ひます<sup>(14)</sup>」と勧めている。中国の状況において民俗学を発展させるためには、日本の柳田系統の郷土研究より、欧米の文化人類学、或いは社会人類学に学ぶべきだという主張である。

実際、彼は20年代後半から次第に中国民俗学運動の主流から遠ざかっていった。一方、民俗学的素養に支えられた多くの業績を世に送り出し、民俗学の理解者として日本民俗学や欧米人類学の成果を紹介し続けた。彼の紹介で、迷信や俗信に関心の深い江紹原（1898-1983）と南方熊楠の間に1928年頃一時交流の事実もあった。<sup>(15)</sup>

## 二、中山大学時代—何思敬

周作人を日本民俗学の理解者と紹介者であると言うならば、何思敬（1896-1968）は早い時期に中国の民俗学運動を日本に紹介した者であった。

何思敬は浙江余杭県に家の長男として生まれ、1912年日本に渡り、京都で日本語補習を受けた後、中等美術工芸学校で図案設計を学んでいた。1915年中国政府の官費留学生に落第し、9月に一旦帰国し、杭州の工場で働くが、1916年春、再び日本に渡り、一高の予科を経て1917年9月に仙台の二高に入学した。<sup>(16)</sup>

彼より2歳下の岡正雄が二高の同級生であった。かつて孫文の中国革命に感動し、東亜同文書院の『支那』を購読して同書院への進学も真剣に考えたことがあるという岡と何はすぐに友人となった。1920年秋、何は中国政府の官費生となり、二人とも東京帝国大学文学部社会学科に入学し、友情がさらに深まった。

1923年末、岡は柳田宅で行われる第一回民俗学談話会に参加し、卒業後、東京社会学研究会で田辺寿利（社会学）、秋葉隆（朝鮮研究）、鈴木栄太郎（農村社会学）などと知り合い、またシュミットの民族学にも接した。1925年4月、岡は神奈川県藤沢鵠沼に転居したが、当時何思敬、田辺寿利、内藤吉之助（法制史）なども近所に住んでおり、若い人たちは「日夜交友<sup>(17)</sup>」していたという。

この年の11月に柳田は民俗学、人類学、民族学、考古学、言語学、歴史学などにわたる総合雑誌として『民族』を創刊し、岡正雄、田辺寿利、石田幹之助、有賀喜左衛門、奥平武彦など若手研究者を編集陣とした。有賀喜左衛門は何、岡の二高での2年上の先輩にあたり、後京都帝国大学に行き、柳宗悦の影響を受けて朝鮮美術に興味を感じて取組んだが、『民族』では久しぶりに再会したとも言える。<sup>(18)</sup>

柳田は晩年の回想『故郷七十年』で「交友録 エリセーフ父子」の最後に何のことに触れている。

「支那の学者では、われわれが『民族』という雑誌を出していた昭和の初めに来て、社会学の勉強して帰った何思敬という人がいた。もとは何畏とって、国民党の大長老で、浙江省出身の張静江の甥という話であった。帰国して、満洲事変の前後には、広東の中山大学の法学部長などをしていたこともある。あのころはやって来ても、日本が威張っているところで、気の毒だったが、今訪ねて来てくれたらいろいろ話ができそうに思う。細君は支那大使館詰の人の娘で、実践女学校出身だそうで、日本婦人と全く変わったところがな

かった。」

何畏は、何思敬の本名ではなく、筆名であった。何は学部在学中の1923年、郭沫若、郁達夫、成倣吾などが結成した創造社の刊行物に投稿し始め、のち創造社のメンバーとなったが、その投稿は「何畏」の筆名で行われていた。また彼は父親の関係で張静江の世話になっていたが、実の甥ではなかった。若い人たちの間の密接な交友関係によって何思敬は柳田と面識があったが、しかしあまり付き合いはなかったことが窺える。何思敬は柳田にとって印象深かったのは、国民党の大物張静江との関係もあるだろうが、何より何が柳田主宰の『民族』誌上で中国の民俗学運動を紹介したからだと思われる。

北京大学においては1922年12月に『歌謡週刊』が創刊されたことが前文で触れたが、その後、1925年10月に、国学門編輯室、歌謡研究会、方言研究会、風俗調査会、考古学会、明清史料整理会などの合同発表機関として『北京大学研究所国学門週刊』（1926年10月から月刊、1927年末休刊）が発刊され、『民族』の創刊より1ヶ月早かった。民俗学関連の内容が多かったため、当誌の創刊は中国における民俗学運動の気運が一段と高まったことを示していると言える。

『民族』の同人であり、当時東洋文庫主任の石田幹之助は、日本において中国の学界の動向に関する最も重要な情報源の一つであった。彼は中国民俗学に関する新しい動きにいち早く注目し、その関連雑誌や出版物について意図的に集めていた。<sup>(19)</sup> 石田と東洋文庫を通して関係資料を閲覧する便を得て、中国の民俗学運動の動きを知った何は、「底深い喜びを感じ」、何畏の署名で「支那の新国学運動」という一文を『民族』1-5（1926年7月）に寄稿した。

「前号のラムステット博士、前々号のネフスキー君、又本号の何畏君の寄稿は何れも転載で無いことと、殊に後二君の日本語は共に自筆であることとを特に言明して置く」と「編輯者より」ではわざわざ言及されたこの文章では、何は日本において「自己の民族が歩み来つた真実の道程、民族の過去の生活、文化の真相を探究する要求」が「民族的研究を興し且つ民族学の特殊部門たる日本学の創生を促し」ているとして、中国にも「類似した一つの新しい運動が起つてゐた」と、「新国学運動」としての中国民俗学運動を、日本の状況に重ねながら紹介している。

さらに「偶然にしてはよくも同じ時期に、同様の性質の民族学（ママ）運動の二つの雰囲気東洋に現はれたではないか。光輝の明暗こそ異なれ、此の二つの雰囲気期せずして東洋に現はれたことは慶賀すべきである。此の二つの雰囲気の洋々たる未来を想像せば私の希望は恍惚し、私の責任感が湧き出る。此の二大雰囲気の接近と融合を希望しつつ、大陸のそれを紹介することは意味あること、思ふ」と、両国の民俗学運動の連帯を展望し「日本の斯学の人士が認め且つ彼らに好意ある援助と批評を与えて呉れ<sup>(20)</sup>」ることを願っている。

柳田はこの時期にアジアのほかの国、とりわけ社会発展段階が近似し、自己認識の能力があると判断している中国やインドの状況にかなり関心を持ち、中国の興りつつあった民俗学の気運に対して好意を示している。

例えば1925年5月の講演では、柳田は「支那は現在に於ても確かに智識の大宝庫であり、それが開かれると世界は均しく益するのであるが、彼等自身の鍵は失われたか、然らざれ

ば大に錆びて居る。それが最近に至つて始めて心付く者が出て、改めて史書以外の資料を直接に民間に求めようとして居る。<sup>(21)</sup>」と述べている。

1926年5月の講演で、さらに「隣国支那などもいつになつたら、無学者の歴史が明かになることかと思つて居ると、却つて日本人よりは御先きへ、民俗学の国民化が始まらうとして居る。是は我々に取つては何よりも心丈夫なことで」あると<sup>(22)</sup> 賛辞を送っている。

「最近に至つて始めて心付く」隣国を、「却つて日本人よりは御先へ民俗学の国民化が始まらうとして居る」と評価するようになったのは、中国民俗学運動に対する認識に明らかに大きな変化があった。これは勿論中国民俗学の発展状況そのものと関連するが、何のような中国民俗学の動きや熱意をしっかりと伝えてくれる人物が身近にいたという環境も重要である。「何よりも心丈夫」とは中国における同じ学問への期待と連帯感だと理解することが出来、何の文章とは互いに呼応するものである。

『民族』1-5が発行された1926年7月、中国では清朝滅亡後の全国統一を実現すべく、広東国民政府による北伐戦争が正式に始まった。多くの留学生がその刺激で学業を切り上げて帰国していたが、当時東京帝大の大学院に進学していた何も広東政府の招聘によって1927年1月に国立中山大学の法学院教授として赴任し、2月に法科副主任にも任命された。

時を同じくして、北京大学学長である蔡元培が更迭され、民俗学運動の主導者を含む多くの教授が廈門大学や中山大学へ南下し、運動の場も北から南へ移っていた。1927年11月に、中山大学には中国で初めて「民俗」と冠した学会「民俗学会」が成立し、<sup>(23)</sup> その後北京大学時代から民俗学運動の中心的人物の一人・顧頡剛（1893-1980）の指導の下で活発な組織的な活動を展開し、民俗学運動の中心としての地位を固めていった。

顧が廈門大学から中山大学に移ってまもなく1927年5月に既に何に会い、1928年の4月あたりまで二人は頻繁に共同行動し、民俗学について情熱的に取り込んでいた。<sup>(24)</sup> 日本留学中、岡正雄などの友人の影響で、民俗学の意義を知り、外国の関連文献も広く把握していた何は、「民俗学会」の最初からの会員であり、顧と民俗学会のメンバーから一目置かれる存在でもあった。

民俗学会創立早々、彼はバーン（C.S.Burne）によって大幅増改訂された英国民俗学協会刊行の『The Handbook of Folklore<sup>(25)</sup>』を会員に紹介し、翻訳を勧めた。1928年、その部分訳として楊成志訳『民俗学問題格』、楊成志・鍾敬文共訳『印欧民間故事表』が中山大学民俗学会叢書として上梓され、外国民俗学の理論導入に口火を切り、バーンの同書も戦前、中国民俗学ではもっとも知名度の高い海外民俗学書の一つとなった。<sup>(26)</sup>

また顧の依頼に応じて『中大週刊』「風俗研究」特集号（1928年1月）に「巻頭語」、『民俗』週刊創刊号（1928年3月）に巻頭論文「民俗学の問題」（写真2）、『京報』副刊「妙峰山進香特集」への序文（1928年4月）などを執筆したり、民俗学会主催の「民俗学伝習班」（1928年4月）で「民俗学概論」を講義したり（写真3）、初期において学会の影響拡大に重要な活動のほぼすべてに、何思敬の姿が見られた。

岡流に近い「民族運動」としての民俗学という理解を開陳し、<sup>(27)</sup> 強い「社会変革」の使命感を示した「風俗研究」特集号「巻頭語」、民俗学のイギリスでの発展と時代背景を整理し、民俗学の研究対象を論じる「民俗学の問題」、風俗の科学的な調査への評価やデュルケム「宗教生活の原初形態」を借りて民間宗教を論じる「妙峰山進香特集を読む」な





写真2 中山大学民俗学会『民俗』週刊創刊号目次  
顧頡剛による「発刊の言葉」、何思敬の巻頭  
論文「民俗学の問題」がある。  
『民俗』1-1(1928年3月)



写真3 1928年7月中山大学民俗伝習班卒業写真  
前列右から2番目は顧頡剛、3番目は楊成志、5番目は鍾敬文、  
左から1番目は何思敬、後列右から2番目は容肇祖、3番目  
からは6名の卒業生。  
『民俗』17・18合併号口絵(1928年7月)

どは、何れも欧米人類学民俗学の状況を広く押さえた上での理論的な文章であり、中国民俗学の視野を世界に広げるのに一役買ったといえる。

しかし一方、そもそも社会学の補助科学として民俗学に接した何は、とくに中国において民俗学の独立科学としての可能性について疑問を感じている。例えば楊訳『民俗学問題格』のための序言(1928年6月25日付)では、彼は独自の方法がない民俗学は「学問の手段Scientific Means」であり、独立した系統的な学問ではない。その有効性から学問の中の独立した一部門になれるが、その場合、「民俗学」ではなく「民俗誌」と呼ばれた方がふさわしいと述べている。

人間関係やその他の理由によると思われるが、これ以降、何は民俗学会の活動にあまり積極的ではなくなり、記録で確認できたのは1929年夏に大学の委託で日本から民俗学人類学関係を含む図書を大量に購入したこと<sup>(28)</sup>や、1930年「民俗学組」の主任となり、『民俗』週刊を中止し、今後の活動計画を作成したこと<sup>(29)</sup>くらいであった。

一方、政治的な運動に積極的に参加するようになっていった。1931年6月廣州から上海に移り、12月に上海文化界反日会に活動に参加し、以降その責任者にもなる。1932年5月に何は中国共産党に入り、その後、中山大学(1936年1月まで)、香港(1937年6月まで)を経て上海に戻る。盧溝橋事変後、南京—武漢—山西大学を経て1938年3月に延安に至る。延安で9年間、マルクスレーニン著作の翻訳、理論紹介や、日本人捕虜の再教育に励んでいた。

### 三、杭州時代—鍾敬文・婁子匡

『民俗学』3-11の編輯後記では「本誌に載つた内藤智秀氏の「回教徒の祈祷作法」松村武雄氏の「民間伝承と自然的環境」、外資料数篇が最近中華民国中山大学の少壮学者によつて漢訳されました。新興支那の民俗学研究熱はすさまじいものです」とある。内藤の文

章は第17回民俗談話会で「トルコ回教徒の祈祷作法」の題で口頭発表を経て『民俗学』3-7の巻頭を飾り、松村のものは3-8～10に3回にわけて連載されていた。

『民俗学』と中山大学の関係は何思敬に遡ることが出来る。

指導者である柳田国男と、岡正雄を始めとする若手編集陣との間に「創刊当時の如き充分かつ協動的なる関心と努力と<sup>(30)</sup>」が失った中で、『民族』はついに1929年4月の4巻3号で休刊となったが、廃刊を惜しむ同人は3月から月例の「民俗学談話会」を重ねた中で折口信夫を中心として「民俗学会」が組織され、機関誌として7月に『民俗学』が創刊された。

『民俗学』1-3から「会員名簿」（以降1-4、1-5、2-1）を載せているが、そこに「何思敬」の名前が確認される。同じ号の「学会消息」に「○何思敬氏 東京帝大、社会学科を卒業して帰国、国立中山大学の教授となつた何思敬氏は、今回同大学図書購入の用務を帯びて八月上旬来京、約一ヶ月滞在して帰国した」と報じられ、何が来日したのはちょうど民俗学会創立の直後にあたり、旧友と再会した際に入会したと考えられる。同じ記事ではさらに「同氏は今後支那に於ける民俗学会の状況を時々通信せらるる筈である」と続き、中国民俗学運動の当事者として何による最新情報の提供が期待された。

その後、誌上では何による中国民俗事情に関する通信は見られなかったが、『民俗学』2-11号（1930年11月）の民俗学関係書誌では初めて中国の出版物として「雲南民族調査報告 楊成志著 民俗問題格 戴伝賢著（マ） 中華民國国立中山大学言語歴史学研究所」が挙げられ、中山大学との特別な関係が窺える。

しかし『民俗学』3-11（1931年11月）になると、事情はやや違う。中山大学民俗学会が「民俗」週刊の刊行や数多くの叢書出版などで影響を拡大していく中で、実務的なことを一手で引き受けていた鍾敬文（1903-2002）は1928年7月に、編集に関わった刊行物に猥褻な内容があったとして大学側に契約を打ち切れ、9月に上海に立った。その後、指導者の顧頡剛や実務方の容肇祖（1897-1994）は相次いで離れ、大学側の経費不足もあり、1930年4月以降民俗学会の活動が事実上停止し、10月にその母体である言語歴史学研究所も閉所とされた。1933年1月から容肇祖を迎えて『民俗』週刊が一旦復刊されたものの、6月に容は契約更新にならず再度停刊となった。この時期の中山大学の民俗学活動は、日本の雑誌に目を配り翻訳までする状況にはなかった。

『民俗学』4-3（1932年3月）の編輯後記でも中山大学が登場し、「支那の中山大学を中心とした民俗研究学者及び欧米の民俗学会では吾が「民俗学会」を日本代表民俗研究団体と認め研究交詢の嚮漚を盛に受けます」という。これも同じ理由で、中山大学の民俗学者グループだと考えられない。

『民俗学』4-9（1932年9月）の「学界消息」では「○民俗学集 第二」が見られ、「支那杭州金波橋一号、中国民俗学会発行の支那に於ける民俗学の専門誌」という説明が添えられている。挙げられた目次から、これは8月に杭州で出版されたばかりの『民俗学集鑄』第2輯のことであるが、「金波橋一号」は印刷所弘文印書局の住所のはずで、中国民俗学会の住所は当時「杭州吉祥巷四三号」であった。

杭州省立商業中学を経て1929年春、浙江大学文理学院非常勤講師（32年8月に専任講師）となった鍾敬文は、銭南揚と「民俗週刊社」という名義で、5-7月当地『民国日報』の附

刊として『民俗週刊』を計9号発行した。<sup>(31)</sup> 1930年8月から鍾敬文、江紹原や寧波から杭州に移った婁子匡(1905-2005)などが『民国日報』で再び『民俗週刊』を発行し、10月の8号から「民俗学会編」という名義にし、休刊を宣言する第60号で大規模な中国民俗学会を結成する計画を告げている。<sup>(32)</sup> 当時江は既に北京大学に赴任し、鍾、婁が中心であった中国民俗学会の最初の活動は、『民俗学集鑄』第2輯の発行であった。(写真4)

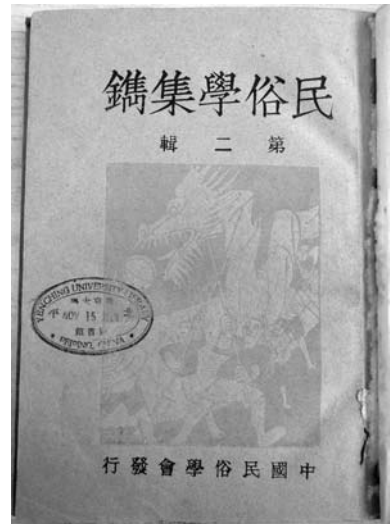


写真4 中国民俗学会編『民俗学集鑄』第2輯表紙絵の内容はめでたいことを祝う龍舞である。  
『民俗学集鑄』第2輯(1932年8月)

第2輯と称する所以は、かつて1931年7月に鍾、婁が「民俗学会」名義で『開展』月刊10・11合併号「民俗学特集」を編集・発行したことがあり、『民俗学集鑄』第2輯の発行に際し、それが第1輯として追認された事情がある。当事者は1930年からの民俗学会と後の中国民俗学会を一続きの活動として認識しているのである。

実は前記『民俗学』3-11で言及された内藤文章の訳文はまだ確認できていないが、松村武雄論文の部分訳であった「地域に決定された習俗と民譚」(訳者「白樺」)を載せたのは後に『民俗学集鑄』第1輯として追認された『開展』月刊の「民俗学特集」であった。

すると、『民俗学』3-11号以降、「中山大学」として報じられてきた翻訳も学会交流の打診も、実は鍾敬文など杭州にいる民俗研究グループの活動であったと理解するのは、最も合理的である。鍾が初期の中山大学民俗学会で大いに活躍し、婁子匡の『紹興歌謡』も中山大学民俗学会叢書の一冊として出版されたことを考えれば、二人は明確に中国民俗学会という名を打ち出す前に、日本では「中山大学の少壮学者」と誤解されても無理はない。

中国民俗学会の華やかなデビューを飾った『民俗学集鑄』第2輯では、顧頡剛、周作人、江紹原、銭南揚、劉大白、黄石など錚々たる執筆者の顔触れが見られる。そして名が知られている各地の民俗学者134人による「同仁録」や、民間月刊(陶茂康編)、民俗週鑄(張之金、中国民俗学会呉興分会出版)、民俗旬刊(掲陽、韓祠馨策文学社)、燕京学報(燕京大学国学研究所)、民俗週刊(魏応騏・江鼎伊、福州烏石山師範民俗学会)、民俗(漳州民俗学会)、民衆教育季刊(浙江省立民衆教育実験学校)など遠近の民俗学関係雑誌の要目の紹介なども載せられている。低迷する中山大学民俗学会に代わって全国の民俗学活動を束ねて推し進める機関となるままならぬ抱負が窺える。

一方、前出周作人「遠野物語」がこの特集で全文再録された外、秋子女史(陳秋帆、鍾敬文夫人)訳の田中香涯「巫娼考」、鮑維湘訳の森鹿三「中国古代の山岳信仰」など日本関係の寄稿が多く、「紹介」欄の冒頭に『郷土研究』6-1<sup>(33)</sup>と『民俗学』4-1～6<sup>(34)</sup>の要目、編集者、発行、定価も載せられている。中国民俗学の代表として海外、とくに日本との提携の意欲が強く感じられる。8月に出版したこの本が『民俗学』の9月号に紹介されたことも、寄贈したからだと思われる。

『民俗学』も小山栄三が編集を引継いだ3-8から英文タイトルの「The Japanese Journal of Folklore」に「& Ethnology」を追加し、「本誌は漸次日本民俗学界の国際的進出に貢献することが出来てくるのは嬉しいことです。(中略) 学問の真の発達は国際的協力によ

つて始めて可能であると信じてゐる」(3-11「編輯後記」)や、「日本の民俗研究もだんだん国際的に進出して行けるのは愉快なことです」(4-3「編輯後記」)と、中国民俗学の情報があるたびに、国際的な提携に前向きな態度を示している。

中国民俗学会が結成後、陶茂康個人で編集していた『民間月刊』が2-1(1932年10月)から学会との共同編集と改められ、寄稿も「婁子匡方」となり、実際中国民俗学会の機関誌の性格を持っていた。(写真5)『民俗学』と合わせてみれば、1933年末まで鍾・婁と日本の民俗学会との間に頻繁な交流があったことが分る。

例えば、鍾敬文は日本民俗学会の常任委員で『民俗学』でも活躍していた松村武雄との間の交流である。

前記松村文章の部分訳を載せた『開展』月刊「民俗特集号」では、鍾敬文の「中国民間故事形式」という一文もみられる。この文章は後に『旅と伝説』1943年新年号で角川源義によって訳され「中国民譚型式(上)」として載せられているが、冒頭に角川は「神田の某書店で得た支那書籍の一冊に「開展」といふ雑誌があつた。…杭州民俗学会で編輯されたものらしく、この学会から郷土研究社に寄贈されてゐる」と述べている。『民俗学集鐫』第2輯では日本の民俗学雑誌として『郷土研究』と『民俗学』が挙げられているし、「寄贈書目」には載せられていなかったが、この特集号は同時に日本民俗学会にも寄贈されたと思われる。

特集の編集後記では、鍾は松村を紹介し賛辞を送っているが、二人の付き合いはこれで始まったかどうかは定かではない。しかし、中日両方国際的な提携に情熱を示した1932年後半以降、連絡が密になったことは間違いない。

『民俗学』5-2(1933年2月)で「松村武雄氏 支那の民俗旬刊のために、『狗人国試論』を執筆」とあるが、鍾敬文が編集する『民衆教育季刊』3-1「民間文学特集号」(1933年2月)に掲載した周学普<sup>(35)</sup>訳の長編論文「狗人国試論」(pp.7-35)は、鍾の依頼に応じて書き下ろされたものであった。松村がこの文章で指摘したトーテムとの関連は、鍾敬文に影響を与え、後に「槃瓠神話の考察」(1935年夏執筆<sup>(36)</sup>)における主要な論点となっている。

一方、鍾は前出「中国民間故事形式」をさらに発展させ、「中国民譚の型式」として『民俗学』5-11(1933年11月)に発表しているが、この記念すべき日本の学術誌でのデビューは、9月22日付自序の「松村博士から論文の撰述を嘱せられてあるので(後略)」や、同号「編輯後記」での「松村武雄先生の御好意によつていただきました」との説明を見れば、松村の斡旋によるものだと分かる。

鍾の文章に先立って『民俗学』5-1(1933年1月)で巻頭論文として婁子匡による「中国民俗学運動の昨日と今日」を載せている。その冒頭で「小山栄三氏(の求め)に応じて撰す」と記している。かつて1931年夏の『開展』特集号を編集した頃構想されていたが実現できなかった、過去を明確に清算する「我が国近年来の民俗蒐集と研究」のような文章は、日本民俗学会との交流に際し、『民俗学』の編



写真5 中国民俗学会編『民間月刊』2-1表紙  
中国民俗学会の機関誌ともいうべき  
月刊誌の第1号である。  
『民間月刊』2-1(1932年10月)

集責任者の求めに応じる形でようやく完成できたのである。<sup>(37)</sup> 次号「編輯後記」で中国語原文のまま載せた婁の文章を「近く翻訳して、再び、載せること」が知らされ、<sup>(38)</sup> 多くの読者がこの文章に関心を感じ、理解しようとしていたことが想像される。

この文章に合わせて、同じ号から『民俗学』所蔵 支那の民俗学的雑誌目録 東洋文庫閲覧室に保管」として、石田幹之助によって整理された中山大学『民俗』週刊創刊号から第110号（1930年4月）まで各号（うち、6号欠本）の細目が4回に亘って載せられた（5-1～4）。『民俗学』も中国民俗学との緊密な提携に乗り出しているように見受けられる。

その他に互いに雑誌の目次を載せたり、論文や出版状況を報じたりして、国際的な協力を通して民俗学の発展を目指すという共同の目的と関係者の努力の下で、両者の間、1933年を通して組織的な交流ともいえる状況を呈していた。

しかし、『民俗学』は5-12（1933年12月）で休刊し、翌1934年4月に民俗学会の活動も停止した。同人の中で海外の民族文化との比較を志向する民族学、自然人類学、考古学、言語学、社会学、法学などの人々は実行委員会を組織し、白鳥庫吉を初代理事長として日本民族学会を設立し、1935年1月に機関誌『民族学研究』（古野清人編集）を創刊した。その刺激もあり、1935年8月に柳田国男還暦記念のために組織した民俗講習会をきっかけに、民間伝承の会が結成され、翌月機関誌『民間伝承』が発刊された。

中国民俗学会の『民間月刊』も『民俗学』5-12の発行を報じた2-10・11合併号を最後に、1934年4月で経済的な理由で休刊し、その後、鍾敬文は『芸風』を、婁子匡は『婦女と児童』をそれぞれ主とした根拠地として、時には連携し、民俗学的なコラムや特集を組み、活動を続けた。しかし、その活動は啓蒙的役割を果たし、口承文芸の資料を多く集めたのに留まり、当初の大志とは裏腹に、計画された民俗学の叢書も一部しか刊行し得ず、各地の民俗活動を組織し、指導する力も持たなかった。

その中で、鍾敬文は1934年4月から1936年7月にかけて日本留学をしていた。（写真6）

『早稲田文学』で発表された「白鳥処女」についての西村真次論文を見てその中国の実例を補って論じた「中国の白鳥処女説話<sup>(39)</sup>」が西村の評価を得て、早稲田大学の大学院に入学したが、柳田国男を含めて民俗学者に接触を持たず、図書館を毎日通い、独学で欧米人類学、民俗学成果の吸収に努め、理論的思考や人類学の素養を叩き直していた。<sup>(40)</sup>

1935年1月に鍾が石田幹之助の斡旋で『民族学研究』創刊号に「老獺稚型伝説の発生地」を寄稿し、次号でその論文執筆のきっかけとなった論文「老獺稚型伝説の安南異伝」（『民俗学』5-12、1933年12月）の作者松本信広によって、中国がこの型の伝説の発生地である鍾の結論に対して、批判が加えられたようなことがあっても、つい組織的な交流がないまま、日中戦争に突入した。



写真6 鍾敬文の日本留学を送別する中国民俗学会のメンバー  
右から銭南揚、鍾敬文、王鞠候、周学普、婁子匡である。  
『芸風』2-12「人類学、民族学、考古学、民俗学」特集号口絵  
(1934年12月)

#### 四、日中民俗学戦前期の関わり：特徴、影響と限界

以上、駆け足で戦前における日中民俗学の関わりの様相について見てきた。中国における民俗学運動が北京大学時代、中山大学時代、杭州時代という三つの時期に分けられることは大方認められている。<sup>(41)</sup> 日本の民俗学との関わりは、この三つの段階にわたっていることが分かる。関わった人物を見れば、20世紀の中国民俗学運動におけるリーダーとされている5人中4人（周作人、江紹原、鍾敬文、婁子匡<sup>(42)</sup>）が、日本の民俗学と直接な関係を持っていた。

関わりの大きな契機は中国人の日本留学である。明治以降、次第にアジアにおける近代化の先行者の地位を固めた日本には、多くの中国青年が留学したが、しかし必ずしも決まった専攻だけでなく、むしろ日本を媒体に広く西洋発の学問や思潮に接していた。

明治末に留学した周作人は文学やギリシア語が専攻であったが、欧米の学問を吸収しながら、模索期の日本民俗学を見つめ、独自の学問観を形成していた。帰国後、積極的に歌謡収集運動に関わり、民俗学の提唱において指導的な立場を發揮した初期でも、中国と日本の社会や学問の在り方の違いに気付き、民俗学運動から身を引いた後でも、独自のスタイルで文学、社会に対する理解と分析に当っての民俗学的な視点の可能性を示し続けていた。

大正末昭和初に留学した何思敬の専門は社会学であった。しかし友人の関係で広義的な民族学的傾向を持つ当時の形成期の日本民俗学の状況に身を置き、広く欧米学問を吸収する重要性を学んだ。帰国後、彼は民俗学への欧米理論の導入を積極的に勧め、学問の社会運動としての意味を強調した。

二人の留学経験は、さらに周囲の人々の日本との関わりの形成に影響を与えた。周の紹介で、南方と文通していた江紹原、日本留学について何思敬からいろいろ聞いたことが留学する決心につながった鍾敬文などがその例である。

鍾敬文の留学は、長く同居していた日本民族学と日本民俗学が袂を分ち、それぞれ異なる志向と組織方法をもって展開していった時期に当る。中国民俗学や民間文学研究の理論的な素養を獲得するという確固たる目的を持つことが、周や何と違うところであるが、目の向ける先はやはり欧米の民俗学・人類学であった。

日中の関わりが戦前の中国民俗学への影響として、例えば鍾敬文に典型的に見られるように、日本の学者との交流で中国説話の系統的な研究やその他の地域との比較が行われていたことなど挙げられるが、ここで全体的に関わる問題として二点、指摘しておく。

一つは「民俗学」という用語の提唱と定着である。中国では最初に「民俗学」を使ったのが周作人であった。周が帰国した（1911年）のは、日本で「民俗学」という言葉の影響を拡大した石橋臥波などによる「日本民俗学会」（1912年）が成立する直前であった。しかし学会を名づける際「民俗学」を選んだのは、少なくとも同人の中ではそれはある程度流布していたからであろう。例えば後に長く「民俗学」を忌避していた柳田国男さえ『石神問答』（1910年）では山中共古や喜田貞吉への書簡では「民俗学」という言葉を使用している。周作人においては柳田国男の郷土研究も欧米の人類学も「民俗学」として理解しているのがそういう背景があった。

一貫として「民俗学」という言葉を使った周作人の、北京大学に移り歌謡収集運動の指

導者になってからの影響力を考えれば、この言葉を流布させるに果たした役割は大きい。しかし、一方、北京大学時代において、同時に「民学」「民情学」「風俗研究」など多くの呼称が存していた。「民俗学」を定着させたのは、学会の名前だけではなく、雑誌や叢書などでも積極的に「民俗学」を唱える中山大学民俗学会であったといえる。

実は、顧頡剛が最初に計画した学会は「歌謡会<sup>(43)</sup>」であり、1927年11月にまず発刊した雑誌も「民間文芸」で、言葉について定まっていなかった。1928年1月前記「風俗研究」特集号での何思敬の「巻頭語」が「民俗学」への言葉の統一という基調を作り、1月29日付とある「民俗学会小叢書」のための「弁言」では、顧頡剛が民俗学の意義を強調し、「民間文芸」より領域の拡大を宣言している。そこにバーン著書の存在、及び岡正雄がそれを『民俗学概論』と訳したことの意味が大きかったと思われる。

二つ目は、欧米理論の導入や日本民俗学についての情報紹介である。周作人も何思敬も自分の文章では、外国の民俗学・人類学の知識を紹介し、外国理論の翻訳を勧めていた。それだけではなく、何思敬はバーンの『民俗学ハンドブック』の英語の原書とその日本語訳を提供しており、戦前においても一冊重要な外国理論訳書である江紹原訳『現代英国謡俗与謡俗学』（中華書局1932年6月）の原書Arthur Robertson Wrightの『English Folklore』が周作人によって贈与されたものである。<sup>(44)</sup> 戦前の外国理論の紹介は断片的なものが多く、まとめて単著として出版されたり、他の学者によって引用されたりするものが非常に少なかつただけに、この2冊の翻訳紹介の役割が大きかった。

周は「遠野物語」以降、日本民俗学とくに柳田国男の著作研究など、機会あるたびに触れていることが前述のようであるが、一方、留学中の鍾敬文も、「日本民族学会設立趣意書<sup>(45)</sup>」や柳田国男『民間伝承論』序言<sup>(46)</sup>などの翻訳や、『民族学研究』の紹介<sup>(47)</sup>などを行った。

一方、日本民俗学への影響といえば、例えば周作人などの努力で、北京大学を中心とした活動は歌謡収集から方言研究、民俗学研究へと拡大していった。そういう状況は何思敬の紹介で日本の学界に広く紹介し、柳田をして1926年頃、中国民俗学運動に学問の後進国としての連帯感や期待を抱かせた。

あるいは石田幹之助のように、中国民俗学運動が提供した新たな資料を利用し、中国歴史や社会への理解や研究を深めた例も見られる。日中間の交流が盛んであった1933年10月には石田は『民俗学』5-10に「再び胡人採宝譚に就いて」を寄稿し、『民族』4-1（1928年11月）に唐から五代の記録を利用して「西域の商胡重価を以て宝物を求める話」を寄せて以来書けなかった続編には、ようやく材料を得たと述べ、『民間月刊』1-4～12（1931年9月～1932年8月）から「回回採宝」の話21話を材料に議論を展開していた。

さらに関敬吾のように、鍾敬文の中国民話のタイプ研究からの刺激で、日本の民譚について本格的な研究を始めた<sup>(48)</sup>例も挙げられる。

しかし、学問の交流の一般的なイメージ、つまり双方の接触によって、学問そのものに方向性や質的な変化をもたらすことを基準にすれば、戦前期の日中両国の民俗学における関わりは交流といえるほど緊密なものではなかった。それについて、幾つかの理由が考えられる。

まずその関わりは中国側が日本を経由して欧米理論を吸収するのが主要な形であったため、全体的に日本民俗学への影響は情報や刺激の提供以外、それほど大きくなかった。

それからその関わりは基本的に個人に大きく依存し、個人の判断ないし性格や感情に影響されやすい一面を持つ。北京大学、中山大学、杭州の各段階に日本民俗学との関わりが確認できるが、しかしその間に積極的な継承関係が見られない。

さらに日本民俗学といえば、どうしても柳田国男系統のイメージが強い。しかし柳田民俗学の良き理解者である周作人が柳田との間には直接的な交流はなかった。<sup>(49)</sup> 何は柳田と会っていたが、指導関係はなかったし、帰国後柳田についての言及は見られなかった。鍾、婁と交流があった『民俗学』の活動には柳田は一切関わらなかった。留学中つい柳田国男を訪れなかった理由について、鍾は「一国民俗学」の影響と、柳田に教を乞う資格がないという感覚を挙げている。<sup>(50)</sup> これも関係が薄いと感ぜられる理由の一つであろう。

最後に戦争の影響も挙げられる。例えば1937年1月、婁子匡は民俗学・民族学・文化史・社会史の総合雑誌として『孟姜女』月刊を創刊し、『旅と伝説』(10-2～4、1937年2月～4月)や『民間伝承』(2-7、1937年3月)などにも寄贈されている。細いながらも両国の民俗学は情報交換のパイプを持っていた。しかし戦争の勃発によって5号(1937年6月)まで発行したこの雑誌はやむを得ず中断し、婁も北京、広州、杭州などで活躍していた他の民俗学者と同じように内陸の奥地に移した。

日中戦争に入り、日本の多くの民俗学者は記者、軍人、調査員、学者、教育者など様々な身分で中国に赴き、民俗学研究を含む多様な活動を展開したが、中国民俗学とあまり接点を持たなかった。<sup>(51)</sup> 両国の民俗学が再び関係を持つのは1980年末、中国民間文芸研究会の招聘により日本口承文芸学会が中国訪問するのを待たなければならなかったのである。

注：

- (1) 『国立北京大学研究所国学門概略』1927年。
- (2) 周作人「市河先生」(1935年4月付)『苦竹雜記』良友図書印刷公司、1936年、「72日本語を学ぶ」『知堂回想録』聴涛出版社、1970年。
- (3) 周作人「吾輩は猫である」(1935年5月付)『苦竹雜記』前掲所収。
- (4) 周作人「我が雑学」(1944年7月付)『苦口甘口』太平書局、1944年。
- (5) 周前掲「我が雑学」。
- (6) 『読売新聞』1910年5月28日(石井正巳『遠野物語の誕生』ちくま学芸文庫、2005年p246を参照)。
- (7) 周前掲「吾輩は猫である」。
- (8) 周作人「遠野物語」(1931年11月17日付)『東方雑誌』第29巻第2号、1932年1月。
- (9) 松枝茂夫訳『周作人文芸隨筆抄』(富山房、1940年)に周前掲「遠野物語」を収録している。戦後、大藤時彦「解説」(『遠野物語』角川文庫、1969年)、飯倉照平「周作人と柳田国男」(『柳田国男全集月報』25、筑摩書房、2001年1月)、鶴見太郎『民俗学の熱き日々』(中公新書、2004年)などでこの事実に触れている。
- (10) 周前掲「我が雑学」。
- (11) 周前掲『苦竹雜記』所収。
- (12) 周作人『藁堂雜文』(勳力出版社、1943年)所収。
- (13) 周作人『夜讀抄』(北新書局、1935年)所収。
- (14) 方紀生「周先生の点々滴々」(1942年3月付)『周作人先生のこと』(光風館、1944年)所収、pp.214-215。
- (15) 小川利康「中国の民俗学者江紹原と熊楠」『文学』8-1、岩波書店、1997年1月。



- (16) 何思敬の略歴は中共党史研究会編『中共党史人物伝』第44巻、陝西人民出版社、1990年を参照した。
- (17) 岡正雄『異人その他』言叢社1979年の巻末年譜による。
- (18) 石田幹之助「柳田先生追憶」『石田幹之助著作集4』六興出版1986年。
- (19) 石田は北京大学の民俗関連出版物を網羅的に集め、東洋文庫で保管していたことについては何思敬「妙峰山進香特集を読む」(『民俗』国立中山大学語言歴史研究所、1928年4月)を参照。
- (20) 何畏「支那の新国学運動」『民族』1-5、1926年7月、pp.921-929。
- (21) 柳田国男「青年と学問」『青年と学問』所収(『柳田国男全集』4、筑摩書房)p27。
- (22) 柳田「Ethnologyとは何か」『青年と学問』所収、前掲p160。
- (23) 「学术界消息」『国立第一中山大学語言歴史学研究所週刊』第2号。
- (24) 『顧頡剛日記』(台湾は聯經出版事業2007年、大陸は中華書局2010年)1927年5月—1928年12月を参照。
- (25) 日本語訳は岡正雄『民俗学概論』岡書院、1927年4月。
- (26) 例えば中国人による初の民俗学概論と言われる林惠祥『民俗学』(商務印書館、1934年)はそれをベースに編集されたものであり、多くの民俗学文章でもバーン著が引用されていた。
- (27) 「支那の新国学運動」では岡正雄の民族学的研究に社会学的方法の適用を要求するという主張と努力に対して賛同と尊敬の意を抱き、自国においても主張したいと述べている。何前掲P131。
- (28) 「通信」(鍾敬文より容肇祖宛1929年11月25日付)『民俗』92号、「本誌の今後について」『民俗』週刊101号(1930年2月20日)など。
- (29) 何思敬「民俗学組通函一則」『民俗』週刊110号(1930年4月30日)
- (30) 岡正雄「休刊の辞」『民族』4-3、1929年4月。
- (31) 「通信」(鍾敬文より容肇祖宛)『民俗』週刊83号、1929年9月25日。
- (32) 王文宝『中国民俗学史』巴蜀書社、1995年、p233-234。
- (33) この号は1932年3月1日発行。巻頭は柳田国男の「年木・年棚・年男—正月行事の変遷—」。要目では、柳田以外、中山太郎、中道等、南方熊楠など大物の文章は挙げられておらず、宮本常一を始め、口頭伝承を中心にピックアップされている。当時の中国民俗学界の日本民俗学についての知識と研究の関心が窺える。
- (34) 折口信夫「峯の雪」、中山太郎「農業歴」、岡本良知「へいさらばさら考」、饗庭斜丘「咒歌から俚謡へ」、中山太郎「箸の話」、李家正文「用桃避鬼考」、孫晋泰「蘇塗考」、南方熊楠「塩茄子の笑話」、折口信夫「年中行事」など、論文にあたるものは漏れなく挙がっている。
- (35) 周学普は東京帝大卒、当時鍾と同じく浙江大学の講師で、友人でもあった。
- (36) 『同仁』同仁会編10-2～4に三回連載された(1936年2～4月)。
- (37) 特集号の編集後記による。なお、この文章は後に一部手を加えてから『民間月刊』2-5(1933年5月)にも載せていた。
- (38) 結局それが出来ず『民俗学』5-5で九一頁の正誤表を載せて済ました。
- (39) 『民衆教育季刊』3-1「民間文学特集号」1933年2月。
- (40) 中国文学研究会のメンバーである実藤恵秀、増田洪、竹内好などと付き合いがあった。加藤千代「鍾敬文の日本留学」(『人文学報』166、東京都立大学人文学会、1984年)、鍾少華編『日本留学経験者が語る日本』(山東画報出版社1996年)などを参照。
- (41) 例えば王文宝前掲『中国民俗学史』、趙世瑜『眼光向下的革命』北京師範大学出版社1999年、直江広治「中国民俗学の展開」『歴史評論』3-2、1948年2月など。なお、近年、学科創立という視点から「杭州中国民俗学会時代」について異議を唱える研究も出ている(施愛東『新しい学科の創立を目指して—中国現代民俗学の鼓吹、経営と衰退』中国社会科学出版社、2011年pp.57-59)。確かに鍾敬文、婁子匡を中心とした杭州での活動について、制度面でも業績面でも北京大学や中山大学の時ほどはっきりした輪郭を持っていなかったし、施が指摘したように、「民俗学に関心を持つ者による民間の組織であり、学術機関或いはアカデミックシステムの内部に入ることが出来なかった」(p59)。しかし、運動としての民俗学を考えると、例えば本論の主題である海外との交流などの面からみれば明らかにそれまでの活動と異なる特色をもっており、同時代でもその影響が認められる。「杭州中国民俗学会時代」とせず、中山

大学民俗学会が活動停滞の1930年夏の杭州民俗学会より1932、33年をピークとして日中戦争までの時期を緩やかに「杭州時代」として括ることが合理的だと思われる。

- (42) 王文宝『中国民俗研究史』黒竜江人民出版社、2003年を参照、もう一人は顧頡剛である。
- (43) 『顧頡剛日記』前掲4月27日。
- (44) 「江紹原より周作人宛1929年1月27日付書簡」張挺・江小惠箋注『周作人早年佚簡箋注』四川人民出版社1992年。
- (45) 鍾敬文編「民俗園地」『芸風』3-2、1935年2月。
- (46) 鍾敬文編「民俗園地 四」『芸風』3-5、1935年5月。
- (47) 「通信」(『民俗』復刊1-2、1937年1月) 1936年11月21日付鍾より楊成志あての書簡では「日本民族学会に季刊があり、すでに2巻4号まで発行している。内容は頗る精彩に富む。既にご覧になったのか」と述べている。
- (48) 関敬吾「中訳本序」関敬吾著・王汝瀾・龚益善訳『民俗学』中国民間文学出版社、1984年。
- (49) 柳田の周への影響は主として雑誌と著書によるものであった。1941年4月、周作人は東亜文化協議会文学部会に出席し、東京で日本ペンクラブの招待を受けたとき、ペンクラブ会員でもある柳田と会うことを望んでいたが、柳田の欠席で叶えなかった(「会員通信」『民間伝承』6-10、1941年7月)。
- (50) 鍾少華編前掲、p29。
- (51) 王京『1930、40年代の日本民俗学と中国』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月を参照。